

社会・人々に向けたメッセージとしての安全目標の役割

藤原未来子

【参加前に持っていた認識・懸念・期待】

・安全目標に関する認識:「安全目標」とは「原子力の世界」と「社会(人々)」との合意事項

←理想的には、安全目標のづくり手(原子力の世界の人々)と社会との対話による「これがリスクになりますよね」というリスクに関する合意形成を経て、づくり手側から数値が示され、「これを達成すべく努力します」、「細かい意味はわからないけれど、対話によって大まかな合意はできているし、あなた方を信じて任せます」という形

・東電福島第一原発事故以来、国民の原子力への信頼は失墜。不信感は未だ払しょくされず。原発に限らず「安全なところからモノを言う専門家・権威への不信」も全世界的にあらゆる方面で顕著

・(政府のエネルギー戦略は説得性に欠けるが、原発との共存が今後も必須とすると)国民の関心は「原発はこの先は大丈夫なのか」、「自分たちの安全は十分に担保されるのか」というざっくりしたところにある。共存への本能的恐怖心・不安を抑えることができ、「諦め」ではなく「腹落ち」、「折り合い」がつけられることが期待される。ただし「十分に担保」を裏打ちする「数字」については、非専門家には理解が難しい。従って「あなた方を信じて任せます」を成立させるには、安全目標のづくり手と国民との間にある程度の合意と信頼が必須。ここでの議論がそのきっかけとなればよいのでは

・専門家には、自分達が議論していること、つくろうとしているものについて国民に説明する社会的責任がある(Accountability)。「誰が、どのように語るのか」というナラティブの部分もみられていることを意識することが必要

・この会合の強みは、東電福島第一原発の事故に直面して心に大きな傷を負いつつ自分の専門と向き合う経験をした専門家たちが集まり、痛烈な経験に基づいた本音の議論を交わせることにある。それを世間にさらけ出すことで、国民と専門家との間に共感が生まれるのでは

・そのような議論を踏まえてつくられた安全目標は、日本のみならずこれからの世界の原子力の安全性の議論に大きく貢献し、リードするスタンダードとなるのでは、という期待

・広報屋は素材(安全目標)をどう料理して社会に渡し、相互のコミュニケーションと理解をどう引き出すのかを考えるのが仕事。そのためにづくり手の視点:端的に言って安全目標とは何なのか;なぜこれをつくったのか;誰に届けたいのか;これを使って何がしたいのか、社会をどう変えたいのか、という委員たちの思い(バックグラウンド)も重要。それを議論の中で見出して、人々に伝えられるような形、対話を引き出せるような形にしていくのがこの会合での自分としての貢献?

【会合での議論は accountable か、社会に、人の心に届くか】

・議論そのものは、専門家の本音が吐露された真摯なものであるとしばしば感じる。これまでの知見、研究成果を歴史的な経緯も含め大量にインプットしていただき、個人的には大変勉強になっている。だが、、

・YouTube で公開されていることも踏まえると、運営側はこの議論をリアルタイムで社会にも届けたいと考えているのだろう。建付けとしては議論は社会にも開かれている。とはいえ、、

・専門家の本音の議論とは思いますが、どちらかといえば非専門家を置き去りにする傾向はないか。社会への目線が落ちがちではないか。この議論をどう料理したら人々の心に届けられるか、これが対話のきっかけになるか、まだよく見えてこない

・精緻に組み立てられた話をなんとか理解しようとする、数字も含めた精緻さに引きずられ、「こんなに整ったものがあるならば、この枠組みに依拠して議論するのがよいのかもしれない」と思ってしまいがち。「なんのための議論か」、「この枠組みそのものは適切なのか」というバックボーンとなる問いを忘れがちになる

・専門家の「社会的責任」の意識も必要では。「最終的には専門家ではない公衆にも提示する」という意識を持ちながらの議論が求められる

・福島を経験した「日本の」専門家としての思いや意気込みが議論からくつきりとは見えてこない。国際機関や英米のつくった枠組みをこれからも淡々と踏襲していくのか？

【けれど発言の端々から見えてくる専門家たちの熱量】

議論の中で。たとえば、、

・「2006 年からもう 20 年近く経っても事故の結果責任をどのように入れ込むのかという議論が国際的にはなされていない」(関村委員)

・「IAEA の場でも福島事故を取り込んだ原子力安全原則になってないじゃないかってことを日本が言わなくちゃいけないはず」(関村委員)

・「1F 事故を発端にしている世界に類を見ない 3 つの炉心を溶かしておいて、あれだけの被害を及ぼした事故の後で何が最低限か、我々はまだまだ最低限にも達していないんじゃないか」(更田委員長)

・(参考)第3回会合で坪倉委員がご紹介された相馬市長のシンプルかつ強いスローガン(メッセージ):「次の死者を出さない」

・あの経験から出てくる「実感のこもった発言」が、新たな安全目標を生み出す原動力なのは

・話者が個人的な考えや感情を開示すればするほど受け手の共感を得られる可能性は高まる

【おそるおそるの提案】

・冒頭で、安全目標とは「原子力の世界と社会(人々)との間の合意事項」と書いたが、それに加えて①「人々(社会)へのメッセージ」、②「日本から世界に向けたメッセージ」という役割を持たせてもよいのでは

・安全目標の中に通奏低音のように流れる「反省」や「心構え」、「気概」といった専門家たちの「思い」をキー・メッセージとして打ち出し、それを「前文」として安全目標の前に置くのはどうか。安全目標の本文に入れ込むことが難しいが「目配りしなければならないと考えていること」を加えるのもよいのでは。この「前文」に入れるメッセージについての議論をしてもよいのでは

・さらに言えば、安全目標を一言で表すキーフレーズが決められると、広報の観点からも公衆の関心を引きやすくなるので有益(プレスリリース等も書きやすい)

以上